

ふたなりコンビニ店員が

後輩に

搾られる







## 目次

運命の夜

お詫びの焼肉

悪魔の結晶

嫉妬

予知夢

朝の治療

海水浴

湯けむりの治療

約束

あとがき

レビューキャンペーン





## 運命の夜

自動ドアが開くたび、熱気と湿気を孕んだ夜風が店内に雪崩れ込んでくる。

その生温かい風は、まるで今の私の股間にまとわりついている、不快で、それでいてどうしようもなく熱い「何か」と同じ温度をしているような気がした。

「いらつしやいませ！　こんばんは！」

私は、自分の喉から飛び出した声の高さに、一瞬だけ安堵する。

よかった。まだ、声は震えていない。私は、女子大生の、バイトリーダーの、皆から頼られる「沙希先輩」のままだ。

レジカウントアの向こうには、数時間後に迫った地域最大の花火大会へと向かう客たちの列が伸びている。浴衣姿のカップル、騒がしい大学生の集団、すでに顔を赤くした中年男性たち。彼らが発する浮足立った喧騒が、今の私には遠い世界の出来事のように感じられた。

私の意識は今、制服のズボンの内側、半径数センチの空間に凝縮されてしまっている。

(……やだ、この感覚……)

レジを打ち、商品をスキャンし、袋に詰める。その一連の動作で身体をひねるたび、下着の内側で「それ」が動き、生地と擦れ合う。

カリ、と。

先端の、一番敏感な粘膜が、安物の化学繊維に引っかかる感触。

その微細な刺激が、電流のような痺れとなって背骨を駆け上がり、脳髓を白く弾けさせる。私はレジ画面を直視したまま、太ももを固く閉じることで、その震えを必死に押し殺した。

「お会計、七百五十三円になります」

笑顔を作ったつもりだった。けれど、目の前の男性客が一瞬、怪訝そうに私の顔を覗き込んだ気がして、心臓が早鐘を打つ。

気づかれた？ この、清楚な制服のズボンの下に、あり得ないほど醜悪に脈打つ、一六センチもの肉塊を隠し持っていることに。

……ううん、違う。男性客の視線は、単に私の胸元の名札に向けられていただけだった。

私は逃げるように小銭を受け取り、レシートを手渡す。指先が微かに客の手に触れた瞬間、ピクツ、と身体が跳ねた。

他人の体温への過剰な反応。それがまた、股間の「それ」を刺激する。

ドクン、と。

自分の心臓が、もう一つ股間にあるような、異様で生々しい拍動。血液が奔流となって下半身に集まり、硬く、太く、質量を増していく感覚。

私はそれを否定するように、さらに強く足を閉じる。だが、その圧力さえも、「それ」にとっては甘美な締め付けとなり、さらなる充血を招くだけだった。

「……沙希先輩、大丈夫ですか？ 顔、ちょっと赤いですけど」

ふいに、横から心配そうな声が掛かった。

ビクリと肩を震わせて振り返ると、そこには後輩の結愛ちゃんが、大きな瞳を潤ませて私を見上げていた。

ショートボブの髪が揺れ、小動物のような愛くるしさが溢れている。彼女は今日、花火大会の特別シフトということで、憧れの私と長時間一緒に働けることに、朝からはしゃいでいた。

「う、ううん。大丈夫。ちょっと店内、熱気がすごいから……」

「ですよねえ！ 今日はお客さんの入りもすごいですし。あ、そうだ先輩！ さっきの揚げ物の補充、私がやっておきましたから！」

「あ……ありがとう、結愛ちゃん。助かる」

「えへへ、任せてください！ 私、今日はずーっと沙希先輩のサポートしますから！」

結愛ちゃんは誇らしげに胸を張り、眩しい笑顔を向けてくる。

その純粹な善意が、今の私には棘のように刺さった。

（……そんな目で、見ないで）

彼女が私を慕うようになったきっかけは、三ヶ月前の出来事だった。

深夜、泥酔した中年客がレジで結愛ちゃんに絡んだことがあった。

「釣り銭の渡し方が気に入らない」という理不尽な言いがかりで、彼女の手を掴んで放そうとしなかった時だ。

まだ研修中だった結愛ちゃんは、恐怖で顔を真っ青にして震えていた。

私は、迷わず二人の間に割って入った。

『お客様、当店スタッフへの接触行為は警察に通報させていただきます。防犯カメラにも記録されていますので』

冷静に、しかし冷徹な声で告げると、男は捨て台詞を吐いて逃げていった。

腰が抜けて泣き出した結愛ちゃんの背中を、私が「もう大丈夫だよ」と優しく撫でたあの夜から――。

彼女にとって私は、ピンチを救ってくれた王子様に映ったのだろう。

だからこそ、知られるわけにはいかない。

今、私の股間で起きている、おぞましい身体変異のことなんて。

事の発端は、ネット広告で見かけた美容サプリだった。

『理想のバストと、内側から燃えるような活力を』という豊胸効果を謳ったキャッチコピーに惹かれ、以前から胸の小ささを気にしていた私は軽い気持ちで試してしまった。まさかその「活力」が、女性であるはずの私に、男性特有の器官を生えさせるものだなんて、誰が想像できただろう。

今朝、起きた時の違和感は、生涯忘れられないトラウマだ。

パッケージの裏面、虫眼鏡でなければ読めないような極小の文字で記されていた『稀な副作用』。まさか自分がそれを引き当ててしまうなんて。

女性としての秘所はそのままに、その上部に熱を帯びた肉芽が新たに追加され、見る見るうちに鎌首をもたげて肥大化していく恐怖。

それは私の意志とは無関係に、まるで独立した生き物のように、硬く、熱く、屹立し続けている。

(……『勃起』、してる……)

脳裏に浮かんだその単語を、私は強くかぶりを振って打ち消した。

やめて。そんな、男の人が使うような言葉を、自分の身体に当てはめないで。

私は女だ。普通の、どこにでもある女子大生だ。

こんな棒のようなものが生えていたとしても、これは病気か何かで、断じて『勃起』なんて卑猥な現象じゃない。

そう言い聞かせなければ、その場で泣き崩れてしまいそうだった。

もちろん副作用を警戒してはいた。しかし、せいぜい気分が悪くなるとか、発熱するとかいった程度のもしか想定していなかった。誰が、こんな変化を想像するだろう。

「先輩、そろそろ休憩してください。私、レジ見えますから」

結愛ちゃんの気遣いに、私は救われたような、あるいは追い詰められたような気持ちで頷いた。

バックヤードに逃げ込みたい。誰の目もない場所で、この苦しい圧迫感から少しでも解放されたい。

私は震える足取りでレジを離れ、「スタッフ以外立入禁止」の扉をくぐった。

バックヤードに入った瞬間、張り詰めていた糸が切れ、私はパイプ椅子に身体を預けて崩れ落ちるように座り込んだ。

静寂。



空調の低い唸り音だけが響く狭い空間で、私は荒い息を吐く。

ズボンのファスナーに手を掛けたい衝動に駆られるが、監視カメラの存在を思い出して手を止める。駄目だ。ここでも、解放することは許されない。

代わりに私は、震える手でポケットからスマートフォンを取り出した。検索履歴には、朝から調べ続けたおぞましい文字列が並んでいる。

『女性 性器 肥大化』

『突起 硬化 痛み』

『副作用 男性化』

そして、指先が吸い寄せられるようにタップしたのは、医学的な『男性生殖器』の解剖図だった。

画面に表示されたのは、無機質な線画で描かれた断面図。

海綿体、尿道、亀頭、前立腺。

普段の私なら、直視することさえ憚られるような、雄々しくグロテスクな器官の構造。

けれど今の私は、それを食い入るように見つめずにはいられなかった。

（私の、中も……こうなってるの……？）

画面の中の図解と、今の自分の感覚を重ね合わせる。

下腹部の奥、恥骨の裏側あたりに感じる、重苦しい疼き。

それは図解にある『精囊』と呼ばれる袋が、満タンに膨れ上がっている場所と一致しているように思えた。

そこから尿道を通って、先端へと至る管が、熱い液体で満たされようとしている感覚。

(……精液)

その単語を認識した瞬間、涙が滲んだ。

嫌だ。汚い。私のお腹の中に、そんな白濁した粘液が溜まっているなんて。

それは本来、愛する人と結ばれて、命を宿すための神聖な行為の結果として受け入れるもののはずだ。

なのに、どうして私が、それを「出す」側にしなければいけないのか。どうして、自分の身体でそれを生成し、排出しなければならないのか。

「うう……」

小さな嗚咽が漏れる。

画面をスクロールすると、『射精のメカニズム』という項目が現れた。

『性的興奮や物理的刺激により、海綿体に血液が流入し、限界に達すると、筋肉の収縮により精液が勢いよく射出される』

無機質な文章が、私に死刑宣告を突きつけてくる。

限界に達すると、射出される。

今の私は、まさにその「限界」の縁に立たされているのではないか。

歩くたびに擦れる刺激。締め付けられる圧迫感。

それらが積み重なり、私の中の『精液』は、今にも暴発しようとしている。

(もし、レジでお客さんの相手をしてる時に……出ちゃったら……)

想像してしまい、顔から血の気が引く。

白い粘液がズボンを汚し、太ももを伝い落ちる光景。

異臭。そして、社会的な死。

あまりの恐怖に、スマホを握る指が白くなるほど力を込めた。

「あ、先輩、お疲れ様です！ 照明も点けずにどうしたんですか？」

不意に。本当に、足音ひとつなく。背後から、明るい声が降ってきた。

「ひっ!？」

心臓が口から飛び出るかと思った。

反射的にスマホを胸に抱いて隠すが、遅かったかもしれない。

恐る恐る振り返ると、そこには休憩に入ってきた結愛ちゃんが、私の肩越しに顔を覗き込むような体勢で立っていた。

その距離、わずか数センチ。

彼女のシャンプーの甘い香りが漂い、その無防備な接近に、私の股間がドクン！ と大きく跳ねた。

「ゆ、ゆゆ、結愛ちゃん!? びっくり、した……」

「あはは、ごめんなさい！ 先輩があまりに熱心にスマホ見てたから、つい」

結愛ちゃんは悪びれもせず、にまにまと言元を歪めて、私の顔と、隠したスマホを交互に見る。

その瞳には、好奇心という名の残酷な色が宿っていた。

「見ちゃいましたよお、私」

「えっ……」

「さっきの画面。あれ、男の人の……『アレ』の図ですよね？」

頭の中が真っ白になった。

見られた。男性器の断面図を、血眼になって見つめていたところを。

「もしかして先輩……彼氏さん、できちゃったんですかぁー!？」

結愛ちゃんの声が、狭いバックヤードに反響する。

彼氏。その単語が持つ意味と、私が見ていた画像の文脈は、決定的に食い違っている。

けれど、彼女の中では「男性器の図を見る」＝「彼氏との行為に興味がある」という、女子大生らしい微笑ましい図式に変換されているようだ。

その誤解に安堵すべきなのか、それとも、もっと深い闇に触れられなかったことを感謝すべきなのか。

どちらにせよ、私の顔は火がついたように熱くなった。

「ち、違う! そんなじゃないの! ただ、その、ちょっと……授業の、レポートで……」

「えー?先輩、経済学部ですよ? そんなエッチなレポートあるんですか?」

「そ、それは……教養科目で……!」

苦し紛れの嘘。声が裏返り、視線が泳ぐ。

普段の冷静な私からは考えられないほどの狼狽ぶりに、結愛ちゃんはさらに面白かったように身を乗り出してくる。

「またまたあー。顔、真っ赤ですよ？ 隠さなくてもいいのに。どんな人なんですか？ 年上？ それとも……」

結愛ちゃんが一步近づく。私は逃げようとして、パイプ椅子から立ち上がろうとした。その時だった。

サイドテーブルに置いてあった、私が休憩用に淹れたばかりのホットコーヒー。

立ち上がるうとした私の手が、そのカップに触れた。

「あっ」

バランスを崩した紙カップが傾く。

黒い液体が、放物線を描いてこぼれ落ちる。

その落下地点は、あまりにも最悪な場所——私の、パンパンに張り詰めた股間だった。

「ひっ、あつ……!!？」

熱湯に近い温度の液体が、ズボンの生地に染み込む。

熱い。焼けるように熱い。

けれど、その熱さが皮膚に届いた瞬間、私の脳内を支配したのは「痛み」だけではなかった。

強烈な、熱刺激。

火傷しそうな熱量が、過敏になりきっていた「それ」を直撃したのだ。

「ん、ああっ……っうー!!」

私は声にならない悲鳴を上げ、股間を押さえてその場にうずくまった。

熱さと痛みが、「それ」の血流を一気に加速させる。

煮えたぎるような感覚。

海綿体が悲鳴を上げ、さらにひと回り大きく膨張しようと暴れ回る。

熱いコーヒーの液体と、内側から溢れ出そうとする熱い体液の区別がつかなくなるほどの混乱。

「せ、先輩!?!」

結愛ちゃんの悲鳴が聞こえた。

彼女は慌てて私のそばに駆け寄り、おろおろと手を泳がせる。

「ご、ごめんなさい!! 私に驚かせたから……!! 大丈夫ですか!? 火傷、してないですか!?!」

「だ、だいじょうぶ……。平気、だから……」

私は必死に首を振る。

触らないで。今、触られたら、何かが終わってしまう。

私の理性も、隠し通してきた秘密も、すべてが決壊してしまう。

けれど、パニックになった結愛ちゃんの耳に、私の拒絶は届かなかった。

彼女の責任感と、先輩を傷つけてしまったという罪悪感が、彼女を強引な行動へと駆り立てる。

「平気なわけなんです! あんなにかかったのに! 早く冷やさないと……!!」

「いいの、自分でやるから……!!」



「ダメです！ 跡に残ったらどうするんですか！ 女の子の大事な場所なのに！」

女の子の大事な場所。

その言葉が、皮肉に響く。

もう、そこは「女の子」の場所じゃない。もっと醜くて、どう猛な獣が住み着いている場所だ。

結愛ちゃん私の腕を掴み、強引に立ち上がらせた。小柄な彼女のどこにそんな力があるのかと思うほど、その力は強かった。

抵抗する間もなく、私はバックヤードの奥にある更衣室へと引きずり込まれる。

「脱いでください、先輩！ 濡れたタオル持ってきますから！」

「まっ、待って結愛ちゃん！ 本当に、大丈夫だから……！」

「大丈夫じゃないです！ ズボン、びしょびしょじゃないですか！」

結愛ちゃんは半狂乱に近い状態で、私の制服のベルトに手を掛けた。カチャリ、とバックルが外れる音が、断頭台の音のように響く。

やめて。見ないで。

私の懇願は、彼女の必死な指先の前で無力だった。

ファスナーが下ろされ、ホックが外される。コーヒーを吸って重くなったズボンが、重力に従ってずり落ちていく。

そして。

露わになったのは、コーヒーのシミで汚れた、白いフリルのついたショーツ。……だけでは、なかった。

そのショーツの中央。本来なら平らであるはずの場所が、不自然に、いや、暴力的に盛り上がっていた。

TENTを張る、という生易しい表現ではない。布地を極限まで押し上げ、その下の形状——亀頭のくびれや、浮き出た血管の筋までもが透けて見えるほどに、それは猛々しく屹立していた。

長さは優に一五センチを超えているだろうか。コーヒーの熱と、恥辱の熱で、それはビクン、ビクンと、結愛ちゃん目の前で大きく脈打った。

「……………え？」

結愛ちゃんの手が止まる。

濡れたタオルを取りに行こうとしていた足が、床に縫い付けられたように動かなくなる。

彼女の視線は、私の顔ではなく、その一点——ショーツを突き破らんばかりに主張する「異物」に釘付けになっていた。

時間が、止まったようだった。

遠くで、花火の打ち上げを知らせる号砲が、ドーン、と鳴った気がした。

店内の有線放送の音が遠のき、私の耳には、自分の心臓の音と、結愛ちゃんの荒い呼吸音だけが響いていた。

「せん、ばい……？」

結愛ちゃんの声が震えている。それは恐怖からか、困惑からか。彼女はゆっくりと、まるで何かに導かれるように視線を上げ、涙目で立ち尽くす私を見た。

そして、再び視線を股間へと落とす。

「これ……なに、ですか……？」

問いかけに対する答えを、私は持っていなかった。

ただ、隠しようのない事実として、私の股間のソレは、結愛ちゃんの視線を感じてさらに硬く、熱く昂ぶり、ポタリ、と先端から透明な液体を滲ませて、ショーツの布地を内側から濡らした。

さっき、私がスマホで見ていた図解。結愛ちゃんの脳内で、あの線画と、目の前の現実がリンクしていくのが分かった。彼女の瞳の奥で、困惑の色が少しずつ、別の色へと変わっていく。

驚きが、理解へ。そして、理解が、奇妙な使命感と……暗い独占欲へと変質していくのを、私はただ、震えながら見ていることしかできなかった。

「……すぐく、おっきい……」

結愛ちゃんが、夢遊病者のように呟く。その言葉は、私の理性を粉々に砕くハンマーだった。

否定できない。逃げられない。

憧れの後輩に、最も醜い部分を晒してしまった絶望。

けれど、その絶望の底で、私の身体はかつてないほどの興奮に打ち震え、お腹の奥の「精液」という名の毒素が、出口を求めて激しく渦巻くのを感じていた。

コンビニの外では、最初の大玉花火が夜空に咲き、轟音が空気を震わせた。

過去作品のIF／続編／前日譚  
あなたオリジナルの妄想まで

pixivにてリクエスト受付中



お兄さん

お会いしましょうね

次の作品でも

古守  
精華堂

最新情報はXで  
@komoriseikado  
をフォロー！

Ci-enはじめました  
先行／限定作品を  
支援者向けに公開中

